

MAENAN SAH Journal Vol.31

～『自分で考え、判断し、行動できる生徒の育成』をめざして～ Feb. 8th, 2024

2学年有志による『未来のまえばし会議』への参加！



SAH Journal Vol.20 でもご紹介した、『高校生がつくる、未来のまえばし会議 with サステナブル・ブランド・ジャパン』は、前橋市内の高校生が町づくりやサステナブルな取組をテーマに高校生同士で意見交換をし、前橋市および前橋市内の企業に対して提案・発表する探究学習会議で、デジタルでの意見交換の場と、リアル会議を融合させた新たな取組となります。本校からも、『前橋市のまちづくりに参加できること』・『他の高校の生徒と交流し、刺激し合えること』・『さまざまな非認知能力を育成できること』などの点に興味・関心をもった、2学年4名の有志生徒が参加してくれました。そして、本校も含めた前橋市内の10校・総勢83名が1/27土に前橋国際大学に集い、前橋市の活性化等について互いに意見を述べ合い、共通のテーマについての議論が行われました。

第一部では、協賛企業の紹介とパネルディスカッションが行われ、テーマ①：「前橋市の街づくりに関する取組」、テーマ②：「めぶく ID と金融機関の役割ー地方創生ー」について、各企業の取組を知ることができました。第二部では、高校生が7つの大テーマに分かれ、各取組（テーマ）についての発表と企業様の取組を紹介・セッションが行われました。最後に、大テーマについて連携・共創・協力ができそうなことを議論し、企業様によって選出された班が、第三部の全体会で発表が行われました。準備期間が限られた中で4名がそれぞれ意見交換し、前橋市の活性化についての具体的方策を考察して、発表原稿を作成しました。当日の様子も含め、ご紹介します！
(2学年主任 岡田 明久)

1. テーマ設定

↓意見交換の様子



12月中旬に、有志4名の生徒が集まり、『前橋市の活性化』について、それぞれが思っていること・感じていることについて、意見交換を行いました。さらに、下図の Liqid (リクリット) : デジタルツール を活用し、各自でコメントを入力したものを、PC画面上で互いに共有しました。

まず、今の前橋市の印象について、『商店街に活気がない』・『お祭りへの来客者が少ない』・『高崎と比べても、駅前も含め人気がない』といった意見が出ました。そのような状況の中で、いかに『前橋市を活性化』するための具体的な方策や、キーワードを下図の【アイデア】の機能を利用し、協議・検討を行いました。また、下図の【前提情報】の機能を利用し、テーマ設定を具体化したうえで、『活性化』のための【方向性・ターゲット】を絞ることにしました。ただ、2学期だけでは時間が足りなかったため、冬休み中に学校や家庭で時間をつくり、デジタルツールを活用しながら、協議・検討を継続しました。

【アイデア】

↓ Liqid (リクリット) : デジタルツール ↓

【前提情報】



『前橋市の活性化のために』 → 人口増加が活性化につながる

【郊外 (例 前南周辺)】
↓
人口減少への対応 → 手立て・開発を行うとすれば… 県外からの移住者をつくる ※H27~令和2年 約3万2千人減少
↓
人口増加が進んだ場合に、どのようなことが必要になるか → 公共交通期間の整備
※住みやすい環境 (待機児童ゼロ、病院・医師多い、大型ショッピングモール)
※温泉をどう活かすか (他県・他地域との温泉施設とikaに、差別化ははかれるか?) → 群馬県の名物・特産品

【観光地】 前橋少ない 草津・伊香保 / グリーンドーム・県庁観光スポット・建物老朽化

3学期に入り、【方向性・ターゲット】について全員で確認をし、絞ることができました。第一に、他校の生徒を考慮し、前南周辺にスポットを当てて具体的な方策を考えてみることにしました。第二に、少子高齢化の影響もある中で、前橋市の人口増加 (人口減少の緩和) が活性化につながるだろうと考えました。第三に、人口増加の手立てとして、前橋市に県外からの移住者が増えるための手段について考えました。以下の点をふまえ、生徒がそれぞれ担当をし、デジタルツールの【プロジェクト】の機能を活用して、発表原稿を作成し、準備を進めました。

2. 発表原稿と当日の様子

【プロジェクト】(発表原稿の一部)

概要

○前南周辺の水田を利用して住宅地をつくる

・水田農家の方の高齢化が懸念

・水田周辺には公共施設や教育機関も充実

ex)赤十字病院,前橋みなみモール,工科大,前橋南高校

・子供の医療費負担なし,物価の安さ,自然災害の少なさ

(大東建託株式会社参考)

▽

ファミリー層を対象としたときに住みやすいまちづくりが完成されている

しかし、、、

県外の方からはあまり知られていない

温泉施設で観光客を呼び込み→移住を検討⇒人口増加にともなう街の活性化

関連リンク

[住みやすさランキング資料](#)

発表の様子(PC画面上で原稿閲覧)



午後、『前橋市の街の活性化・町おこし』を大テーマとした班において、各班で発表を行いました。①テーマ設定(担当:岩野)については、前南の生徒に前橋のイメージを聞き、回答を参考にしつつ【前提情報】をふまえながら、テーマ設定の経緯を説明しました。②方策Ⅰ(担当:福田)については、左図にあるように水田を利用して住宅地をつくることや前南周辺の立地の良さに言及しました。③方策Ⅱ(担当:荒木)については、前橋市の良さを県外の方に知ってもらうために、温泉複合施設(プールの併設・郷土料理・野菜の直売)を建設し、交通アクセスの良さを背景に、多くの来場者が期待できることを訴えました。④まとめ(担当:関)については、自然災害の少なさなどの群馬県の特徴を確認し、ファミリー層などの移住者に対して、前南周辺は住みやすい環境であることを確認し、全体のまとめとしました。次に、各班の発表を参考にし、『前橋市の活性化』に向けた連携・共創・協力ができそうなことを、他校の生徒と協議・発表を行いました。

午後、『前橋市の街の活性化・町おこし』を大テーマとした班において、各班で発表を行いました。①テーマ設定(担当:岩野)については、前南の生徒に前橋のイメージを聞き、回答を参考にしつつ【前提情報】をふまえながら、テーマ設定の経緯を説明しました。②方策Ⅰ(担当:福田)については、左図にあるように水田を利用して住宅地をつくることや前南周辺の立地の良さに言及しました。③方策Ⅱ(担当:荒木)については、前橋市の良さを県外の方に知ってもらうために、温泉複合施設(プールの併設・郷土料理・野菜の直売)を建設し、交通アクセスの良さを背景に、多くの来場者が期待できることを訴えました。④まとめ(担当:関)については、自然災害の少なさなどの群馬県の特徴を確認し、ファミリー層などの移住者に対して、前南周辺は住みやすい環境であることを確認し、全体のまとめとしました。次に、各班の発表を参考にし、『前橋市の活性化』に向けた連携・共創・協力ができそうなことを、他校の生徒と協議・発表を行いました。

3. 最後に(有志生徒の感想)



・岩野令空(りく)【写真左】「各企業の方々の、前橋市活性化のための活動や会社の概要について詳細を聞く事ができ、とても参考となりました。また、他校の生徒との意見交換やプレゼンを通し、自分達の無い視点や発想を広げることが出来ました。これからも前橋市の活性化のために、色々なプロジェクトに取り組んでいこうと思います」

・荒木皓陽(こうよう)【写真左から2番目】「時間をかけて準備を進めてきたので、まずはしっかり自分たちの発表を行えてよかったです。他の高校の生徒とも議論を深めて、より良いアイデアを考えることが出来ました。企業様の講義も、学ぶべき点がたくさんあり、よい機会となりました」

・福田華那【写真右から2番目】「活性化という言葉ひとつとっても、たくさんの意見があり、それを共有することができ、とても充実した時間でした。また、普段聞けないような企業の方の意見も聞くことができ、学びに繋がりました。今回得た体験、知識を活かしていけるよう頑張ります」

・関さくら【写真右】「自分とは異なる意見を持った高校生や、普段は聞くことの出来ない多種多様な企業の方からの貴重なアドバイスを頂き、とても充実した会議になりました。私たちが未来の前橋市を創っていくのだという自覚を持って、これからも様々な活動に取り組んでいきたいです」

以上のように、とても貴重な体験・充実した時間を過ごすことができました。私自身も、当初は他校の生徒と話し合いや協議がスムーズに行えるか、心配でした。ただ、当日の様子を見る限り、まったくのその心配はありませんでした。(2学年主任 岡田 明久)

★教頭より★

現在、多くの高校は「探究」の授業で、『PBL(問題解決型学習:Project Based Learning)』を取り入れています。これは別名『課題解決型学習』とも呼ばれ、「知識の暗記」などの「受動的な学習」ではなく、「自ら問題を発見し解決する能力」を養うことを目的とした教育法を実践しています。「正しい答えにたどり着くこと」が重要ではなく、「答えにたどり着くまでの過程(プロセス)」が大切であるという学習理論です。通常は「高校生が探究の授業で作成した提言を自治体等に届ける」のですが、今回は『自治体が高校生を集め、提言を作成させる』という画期的な取組でした。ということは、前橋市は高校生の尖ったアイデアを受け入れる準備があるということです!4人のみなさん、この貴重な体験を次の機会にいかしてください!お疲れ様でした! 星野 亨

★校長より★

あるTV番組の出演者から「勉強ばかりするのもよいけれども、それでは井の中の蛙になっちゃうよ。」「国際学会で各国の研究者たちの発表を聞き、自分が井の中の蛙だと思い知らされました。」というコメントがあったのを思い出しました。前南生が外(社会)を意識しだした。校内でのSAHから、その先の一步を踏み出したと言える。ダイバーシティを念頭に置き、サステナブルな取組を考えていくうえで、自分の殻から抜け出して他者と協働することが必要不可欠となってくる。「井の中の蛙」だったからこそ限られた中で深い学びはできたし、社会に出ればその分、貪欲になることができる。前南生の未来が楽しみだ。 校長 関根 正弘